東北大学機械系 同窓会ニュース 第15号

東北大学機械系同窓会
〒980-8579
仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-01
東北大学工学部機械知能・航空工学科内
電　話：(022) 795－6926
ＦＡＸ：(022) 795－6926
E-Mail：dousou@mech.tohoku.ac.jp
ホームページ http://www.mech.tohoku.ac.jp/dousou/
郵便振込口座
番号　02270－8－11176
名称　東北大学機械系同窓会
印刷　東北大学生活協同組合

機械系の最近の取り組みについて

例年八月下旬に大学院入学試験が行われますが、平成二十一年八月に実施された入学試験の志願者数は、本学機械系からのそれは例年通りでしたが、他大学からのそれは大幅に減少しました。主な原因として以下の二つが考えられます。第一の原因は、数年前から目立ってきている工学部離れです。それを端的に物語っているのが、毎年七月末に本学で行われているオープンキャンパスへの参加者数の推移です。オープンキャンパスには全国から多くの主に高校生が訪れ、年ごとに行事は盛んになってきていますが、工学部を訪れる学生数は他の主だった学部のそれに比べると増加率は鈍い傾向にあります。第二の原因として、昨今の経済状態が考えられます。これまで、機械関連の産業界は他のそれに比べて比較的不況感が弱く感じられましたが（私の印象）、本年度は、自動車産業に代表されるように、機械関連の産業界も不況の真っ只中にいるようです。ただ、幸いにも、最近では、多少景気が上向いたとの報道が多いようです。これまでにも、工学部オープンキャンパス、オープン講義、主だった高等学校での出前講義などを実施し、志願者の獲得に努めて来ましたが、これだけでは不十分と考え、現在、大学院入試志願者増強プロジェクトWGを立ち上げ、他大学からの志願者数を平成二十年度以前のレベルに戻すべく、機械系の総力を挙げて努力している所です。

本来、学問・教育には国境は存在せず、国際的に普遍のものと理解しています。国内に目を転ずれば十八歳人口の減少や工学部離れなどで、学部・大学院いずれも志願者数が減少傾向にあります。そこで、我々は、本格的に留学生を募集することを始めます。現在、大学院博士課程後期三年の課程（ドクターコース）、大学院博士課程前期二年の課程（マスターコース）、学部での留学生数は、それぞれ一五六名中二十六名一六・七%、四七三名中二十三名四・九%、一一一八名中二十六名二・三%です。ドクターコースの留学生数は比較的多いと感じていましたが、それでも数値は二十%以下となっています。マスターコース、学部に至っては数%に留まっています。幸いにも、本年度（平成二十一年度）本学から申請した文部科学省のプロジェクトグローバル三〇（詳細については、本同窓会ニュース「国際機械工学コースの開設と教育の国際化について」をご覧下さい）が採択され、平成二十二年春の大学院入学試験は初めて海外でも実施いたします。また、学部学生の募集は来年度から始めます。なにぶん初めてのことであり。志願者数など読めない所が多々ありますが、機械系の真の国際化に向けて努力していく所存です。

我々は、機械工学は社会にとって必要不可欠な物あり、人類が存在する限り普遍的に必要な学問と考えています。上述の取り組みを通して、地道に機械工学のために寄与したいと考えていますので、同窓会の皆様のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

和田　仁
（機械系系長）

国際機械工学コースの開設と教育の国際化について

機械系では、本学が採択された「国際化拠点整備事業（グローバル三〇）」に参画し、教育の国際化を推進する目的で、英語コースの開設や、教務システムの英語化などを実施しています。この事業では、①英語による授業のみで学位が取得できるコースの大幅な増設、②留学生受入体制の充実、③日本語・日本文化に関する学習機会の提供、④戦略的な国際連携の推進、のような取組を行い、留学生にとって魅力ある教育研究環境を提供することが期待されています。これらの取り組みは、全学・部局および専攻（学科）レベルでの戦略的な取り組みが必要です。

この事業において機械系では、専攻（学科）レベルでの取り組みとして、学部から大学院（修士・博士）までの課程で、一貫した英語コースである国際機械工学コース（International Mechanical and Aerospace Engineering Course (IMAC)）を新設し、修士・博士コース（IMAC-G）および、学士コース（IMAC-U）の開設を決定いたしました。これにより、海外からの多様な留学生の獲得と、国際的教育環境下での日本人学生の教育を目指しています。

これまでの取り組みとして、平成二十二年十月入学を目指したIMAC-Gコースの募集を行いました。海外大学のスケジュールと工学研究科の入試スケジュールを考慮して、平成二十二年三月に初の入学試験を実施予定です。さらに、本事業では、海外学生がより受験しやすい環境を整備することを目的に、海外において入学試験を実施することを計画しております。本年度は、中国、韓国、ベトナムでの実施に向けて準備を行い、実際の受験実施国は、受験生の居住国を考慮して決定します。このような、海外での入学試験実施の取り組みは、東北大学としても初めての事例であり、その実施内容が学内からも注目されています。

まず、修了に必要な単位数の少ない大学院コースの整備を行い、その後に学部コース（IMAC-U）の整備を行います。学部学生の受け入れは、平成二十三年十月を予定しており、現在、全学教育科目の実施組織として、国際教育院が設置されています。

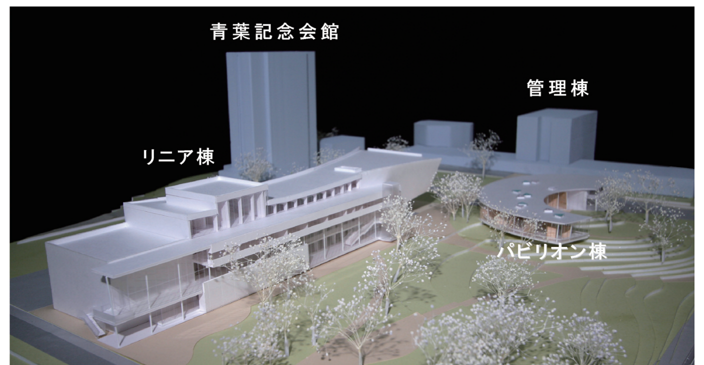
国内における十八歳人口の減少と、教育のグローバル化の進展から、大学の教育システムの国際化は、世界レベルの研究活動を維持するためにも不可欠なものとなってきています。これまでも、個々の研究者の活動は国際化されてきていますが、教育の国際化は、ある意味で研究の国際化以上に息の長い取り組みが必要と考えています。機械系同窓会の皆様にもお力添えを頂ければ幸甚に存じます。ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

機械系グローバル三〇WG
湯上　浩雄
（機械システムデザイン工学専攻教授）

会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が納入される会費によって運営されています。同封の振込用紙を使って会費納入をお願い致します。
◎　年会費　2,000円

青葉山キャンパスの近況



昭和四十年代に機械系が青葉山に移転して以来、四十数年が経過し、現在、工学部ならびに工学研究科の事務がある管理棟や生協に代わる施設をセンタースクエアとして建設中ですので、近年の機械系ならびに青葉山キャンパスの近況をお知らせしたいと思います。

機械系近くの施設としては、機械系の学生ならびに教職員が長年親しんできた「東食堂」が平成十八年十一月末に閉鎖され、その代わりに、青葉城址に抜ける道路脇に新たに「こもれびカフェ」とコンビニエンスストアがオープンしております。また前回のニュースレターでお知らせしたように、「こもれびカフェ」の隣に、平成二十年に「自動車の過去・未来館」がオープンしました。このこもれびカフェや自動車の過去・未来館の近くには植物園への入り口が新設され、さらには仙台市の観光循環バス「るーぷる仙台」のバス停が設置されたこともあり、機械系周辺では週末などに市民や観光客が散策する姿が見られるようになっております。同窓会から寄贈していただいたタービンを興味深そうに見入る方もいらっしゃいます。

機械系内の教育研究棟としては、学生実験棟を建て替えて、三階建の床面積約千三百平米の機械・知能系教育実験棟が平成二十年に竣工し、学生実験や高機能試作センター、研究室の研究スペースに使用しております。

青葉山キャンパス全体としては、冒頭で記しましたように、中央食堂の老朽化・狭隘化などに伴い、食堂スペースと、学生ニーズに対応しやすいように事務機能ならびに大講義室を一体化した施設（リニア棟）を建設中です。このリニア棟は四階建の床面積約五千平米の建物で、一階には現在の中央食堂に代わるメインダイニングが設けられ、二階には四百人収容可能の大講義室と二百人規模の大会議室、三階と四階には研究科長室や事務室などが入る予定です。リニア棟は平成二十三年一月に供用開始予定です。またリニア棟の隣には、床面積千平米の一階建のブックカフェと購買施設の入る勾玉状のパビリオン棟を建設中で、リニア棟に先立ち平成二十二年三月に利用開始される予定です。なお、これらの施設の建設に伴い、共通第一および第二講義室が取り壊され、リニア棟が完成した後には現在の生協がある建物も解体される予定です。

機械系横の環境科学研究科には、川渡農場演習林の木材を利用し、太陽電池デシカント空調設備を導入した微弱エネルギー蓄電システムを研究するための床面積千平米の「エコハウス」が建築中で、平成二十二年三月竣工予定です。また機械系の向かいのマテリアル・開発系においても、革新的環境・エネルギー関連材料技術の融合研究拠点の形成を目指し、延床面積千平米の材料研究共同棟（仮称、平成二十二年九月竣工予定）を建築予定です。

平成二十三年度のゴルフ場跡地への新キャンパス移転、平成二十七年の地下鉄東西線青葉山駅の開業など青葉山キャンパスも転換期を迎えております。お近くにお越しの際にはどうぞお立ち寄り下さい。

祖山　均
（機械系環境施設整備委員会
ナノメカニクス専攻教授）

最先端研究開発支援プログラム「マイクロシステム融合研究開発」

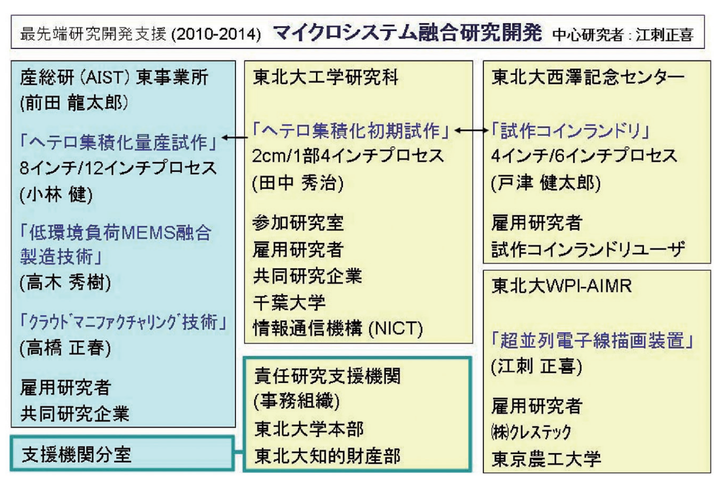
最先端研究開発支援プログラムは総額二七〇〇億円を三十人の研究者にということで昨年募集があり、その後の政権交代で総額一〇〇〇億円に縮小した形で二〇一〇年三月から二〇一四年三月まで行われることになりました。本学からは、電気通信研究所の大野英男教授も「スピントロニクス」で採択されております。

私が中心研究者として採択された「マイクロシステム融合研究開発」では、「マイクロシステム」や「MEMS (Micro Electro Mechanical Systems)」、あるいは「ヘテロ集積化」と呼ばれる分野で、半導体技術に機械や光などの他の技術を組み合わせて高付加価値化を追求するものです（文献一）。安全・安心な社会、環境・省エネルギ、老齢化などの国民的・地球的課題を克服すると同時に、産業に結びつく成果をあげて我が国の産業競争力を強化することを目的として「出口を見据えた研究開発」と位置づけております。我が国では、企業内で以前は将来につながる研究も行われていましたが、グローバル化で競争が激しくなるにつれ短期的な開発しかできなくなる傾向にあります。このためリスクをかけられる大学や公的研究機関が、将来の産業に結びつく研究を担っていくことが必要になっていると思います。これを目指した本プログラムでは、図のようにつくばにある産総研の東事業所と連携し、東北大では自由度を生かした初期試作、産総研では量産につながる量産試作や、その他の関連した技術開発を行います。

我が国からエレクトロニクス産業が消えていっておりますが、これは微細化・高密度化が高度に発達した集積回路の産業で、経済性での行き詰まりに対応できないことも要因です。このため設備を持たなくても開発ができるようにして参入障壁を下げられるようにします。具体的には、本学総長をされた西澤潤一先生が半世紀近く運営されてきた（財）半導体研究振興会が昨年解散した後の建物を整備し、「試作コインランドリー」として会社が来て使えるようにするものです。もう一つは高価なフォトマスクを使わずに、電子データから直接描画して多品種少量で高密度LSIを製作できるようにするものです。このため「超並列電子線描画装置」を東京農工大や装置メーカの（株）クレステックと共同で開発する予定です。

私たちは、「研究成果／研究費用」を大きくするように費用をかけないでスリムな設備で行う研究、および他の研究室や企業からも利用し易くして情報が集まる「オープンコラボレーション」を特徴としてきました。公的研究機関が大学と隣接して設置され、以前から産業に結びつく形で研究が行われてきた欧州などと異なり、このような組織化で遅れている我が国では、産総研などが人材不足で力を発揮できないできました。しかし半導体企業が縮小して優秀な人材を放出している今は活性化するチャンスといえます。この雇用のためにも今回は費用をかけたプロジェクトを始めました。今までよりはるかに大きな研究費を使いますので金額に比例して成果をあげられるかどうかは難しいかもしれませんが、費用をかけたが故にできることをやって波及効果を生むようにしたいと思っています。それは東北大で長年にわたって蓄積してきた産学連携のノーハウ（文献二）を発展させて、産総研にも参考にしてもらい、皆が協力して役割をはたしていけるような、そんなオールジャパンでの連携をしていきたいのです。

（平成二十一年度通常総会にて講演を賜ります）



文献
一）はじめてのMEMS（江刺正喜）工業調査会（二〇〇九）
二）検証 東北大学江刺研究室 最強の秘密（江刺正喜、本間孝治、出川通）彩流社（二〇〇九）

江刺　正喜
（ナノメカニクス専攻教授・原子分子材料科学高等研究機構（WPI-AIMR）教授）

機械・知能系女子学生交流会

機械・知能系女子学生交流会（女子交流会）は女子学生が研究室や学年の壁を越えて気軽に語り合える場として活動しています。女子交流会の主な活動は月に一回の「女子学生のつどい」ですが、オープンキャンパスでの「女子学生による特別企画」なども行っています。私は平成二十年度のオープンキャンパスにスタッフとして参加したのをきっかけに女子交流会の学生スタッフをやるようになりました。

女子学生のつどいでは部屋とお茶を用意し、女子学生同士の交流の場を提供します。そこで参加学生は昼食をとりながらひとときの団欒を楽しむのです。そこは、女性同士だからこそできる相談、学年や年齢を超えての相談など研究室以上の情報交換の場となっています。女子学生のつどいが女性と話をする数少ない機会となっている私にとって、このつどいは私が大学生活の中で最も楽しみにしているものの一つです。女子交流会のスタッフには他の研究室に所属する博士課程の学生もおり、定期的な交流会への参加は私の研究生活に潤いと刺激を与えてくれます。

さらに、女子学生のつどいの一環として、四月には学部一年生や外部から修士課程に入学した学生などの新入生を対象とした交流会を開催します。平成二十一年度の交流会は助教をされている女性研究者によるプレゼンテーションから始まりました。プレゼンテーションの後には学部、修士、博士の学生と助教の先生を交えてのパネルディスカッションを行いました。私も博士の学生代表として参加しました。パネルディスカッションでは新入生から募集した質問に対して答えていくのですが、質問に対するパネラーの回答は本当に多種多様で、私自身も目から鱗の落ちる思いをしました。

また、平成十九年度から行っているオープンキャンパスの特別企画ではオープンキャンパスの案内や機械・知能系女子学生の研究や学生生活の紹介を行います。この企画で実施したアンケートには、「ためになった」「またやってほしい」などの声が多く見られました。会場でも大学生活などについて聞かれることが多く、この企画が高校生の役に立っているのだと感じました。一方で私にとってもこの企画にスタッフとして参加したことはとても貴重な機会となりました。日々の研究生活において分野外の人や一般の人に自分の研究を紹介する機会はあまりありません。そのような中で高校生に自分の研究を紹介することは、自身の研究について一般的な観点からの理解を深めるいい機会になりました。

最後になりますが、私は女子交流会を通して先輩や後輩、高校生と様々な人々と触れ合う機会を得ました。先輩達は親身になって私の相談に乗ってくれました。私が以前感じていたものと同じ不安を抱いている後輩や高校生がいました。私の話はきっと彼女らの助けになれるでしょう。そして私が先輩や後輩達と出会えたのは女子交流会があったからです。私は女子交流会という場があることに、その一員として活動に参加できることに心から感謝します。

中山　雅野
（航空宇宙工学専攻
博士課程後期一年）

女子学生のつどい（四月）でのパネルディスカッション

人力飛行機製作サークル 東北大学 WINDNAUTS の活動について

同窓生の皆様に本学の人力飛行機製作サークルの活動を報告いたします。本サークルは平成五年に設立され、今年で十八年目の比較的新しいサークルです。サークル名は Wind（風）と nauts（船乗り）を合わせた造語で、「風の船乗り」という意味です。機体製作費を含むサークル活動資金は、部費とOB・OGからの寄付によるもので行っています。サークル活動は主に、年に一度テレビ局が主催している、琵琶湖で夏に開催される大会に出場し、人力プロペラ機を用いて飛行距離を競う部門で優勝する事を目標に行われています。

あれだけ大きな機体をどの様に琵琶湖に運ぶのか疑問に思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、機体は分割可能な組み立て式に成っており、トラックで搬送しています。その分割によって製作過程では班を翼、コックピット、操舵、フェアリング、駆動、電装、プロペラという様に分けて活動しています。

既にテレビや学内ニュースでご存知の方もいらっしゃる事とは思いますが、ここ数年で、本サークルは飛躍的に飛行距離を伸ばし、準優勝や優勝をしております。平成二十年に行われた大会では、大会が規定した最大距離を飛行して、三十六kmを記録して優勝しました。この様な進歩の背景にあるのは、先輩から後輩によるノウハウの伝達と徹底的に行われるテストフライトの回数です。

毎年、パイロットをサークル内で選出し、その体型と出力に合わせて機体の設計を行うのですが、設計する際に、経験値的に数値を決める部分も有ります。その部分が年代を重ねるにつれて洗練されていったり、また、製作に関しては、先輩に製作手法などを教わり、自分なりに工夫をして、後輩にそれを伝えるといった様に技術をより良い形で受け継いで行きます。

テストフライトは風の落ち着いている早朝午前三時から集合して行います。初期の段階では、川内のグラウンドで機体の組み立て試験や重心調整などを行います。ある程度、機体の調整を終えると、週末の休日を利用して、宮城県角田市の滑空場で長距離のテストフライトを行います。パイロットの操縦技術獲得を主な目的にしています。この様に万全の体制で大会に挑んでいます。

今年は残念ながら、不況の影響で大会が開催されませんでした。しかし、顧問である大林茂教授（流体科学研究所）を始め、永富良一教授（医工学研究科）など大学の先生方の多大なるご協力を経て、研究活動の一環としてFAI（Federation Aeronautique Internationale）による公式な記録飛行を琵琶湖で行う事が出来ました。

この記録飛行は、自力走行からの離陸が義務付けられており、例年の大会とは異なった状況での飛行でした。また今回は本サークルのメンバーが、飛行の申請や、飛行区域への許可を取り、安全対策や飛行におけるマニュアルを作成したり、初めての事ばかりでした。また、予算面でも通常の大会の約二倍の負担でしたが、様々な人の協力を得て、平成二十一年八月十二日記録飛行を行う事が出来ました。

記録飛行の目標はマサチューセッツ工科大学が保持している世界記録一一六kmと日本大学が記録している日本記録四十九kmを超える事でした。結果は残念ながら二〇・七二kmでした。プロペラを回す際のチェーンを保持する部分が破損した事が原因でした。この失敗を生かして、次の大会に挑んで欲しいと思います。そして、いつか世界記録を超えて欲しいと思います。

来年は例年通り大会が開催されます。その大会における書類審査の結果が、先日届き、合格との結果でした。現役生には頑張って欲しいとエールを送りたいと思います。

同窓生の皆様におかれましても、東北大学 Windnauts の活動についてのご支援、応援を賜わりますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、活動内容の詳細につきましてはウェブサイト http://www.windnauts.sakura.ne.jp/をぜひご覧下さい。

吉本　武史
（元翼班主任・バイオロボティクス専攻　博士課程前期一年）

記録飛行フライト中の様子

機械系ＨＰがリニューアルされました!!

ゆめ・きかい・東北大をキャッチフレーズに内容も充実し、各種情報が入手しやすくなりました。
大学院紹介や学部紹介では、在校生の生の声が見られます。
是非卒業生の方々からも東北大学機械系をＰＲいただければ幸いです
http://www.mech.tohoku.ac.jp/

最終講義

平成二十二年三月三十一日付をもって、機械システムデザイン工学専攻の井上克己先生、バイオロボティクス専攻の小柳光正先生、多元物質科学研究所の河野省三先生が定年退職を迎えられます。これに先立ちまして、二月二十三日に機械系第一講義室で井上先生と小柳先生の最終講義が行われました。

また、三月五日には、材料・物性総合研究棟一号館大会議室にて河野先生の最終講義が行われました。

どの最終講義においても、講演室の席が足りなくなるほどで、在校生、卒業生、教職員および関係者が詰めかけて最後の講義に熱心に耳を傾けていました。

井上克己先生、小柳光正先生、河野省三先生、長きにわたるご指導本当にありがとうございました。ますますお元気で、更なるご指導の程よろしくお願いいたします。

「歯車とデザイン」　井上克己　先生

井上先生の最終講義

「半導体技術の四十年史と異分野融合へ向けて」　小柳光正　先生

小柳先生の最終講義

「研究四十年の回想」　河野省三　先生

河野先生の最終講義

産学連携推進室から

産学連携推進室は平成十二年に庄司克雄教授を中心として組織され、八～九名の産学連携委員により学生の就職活動の支援と研究などに関わる産学交流を目的として活動してきております。

活動としましては、学生の新規採用に関わる企業の方々との面談（自由応募の企業も含む）、機械系内での就職にかかわる学生の面談と就職を希望する企業への推薦、企業と学生の交流の場であるテクノフェスティバルの開催および機械系の教員と産業界との交流を図る技術交流会の開催（年二回）などです。テクノフェスティバルは産学懇談会の会員企業、約一三〇社を二日にわけて、午後半日ずつ、各企業に展示ブースを出して頂き、学生と懇談して頂くもので、産学連携委員の本担当教授の下で、大学院博士後期三年の課程在学の学生がWGとして計画し、開催しています。技術交流会は、研究分野のバランスをとりながら四研究室を交替で選抜し、その研究紹介と研究室見学および機械系教員との昼食会と夕方の懇親会を行っております。これらの活動におきまして、多くの本学機械系同窓生が会社を代表して来られています。私も、平成二十年、二十一年度と産学連携推進室長を務めさせて頂きましたが、その間、多くの同窓生にお会いすることが出来まして、大変懐かしく、また嬉しく思っております。

これらのことから、機械系の学生の企業への就職につきましては、先輩としての機械系同窓生の役割が極めて大きいことを痛感しております。また、技術立国として日本の国力を支える企業の技術力の中心的役割を本学機械系の卒業生が果たしておられることを実感して、大変嬉しく思っております。

研究面での産学交流も技術交流会などをきっかけに芽生えております。

機械系同窓生の皆様方にも、今後益々のご支援を頂きたく存じます。

横堀　壽光
（産学連携推進室室長
ナノメカニクス専攻教授）

事務局より

◎勤務時間が変更になりました
勤務時間　月・水・金　10：00－16：00
Tel/FAX：022-795-6926, E-mail：dousou@mech.tohoku.ac.jp

◎同級会（同期会）ニュース
報告•記事の原稿を投稿してください。字数800～1,000字位、記念写真一葉と一緒に。封筒に原稿在中と明記のこと。送り先は機械系同窓会事務局。

◎同窓会誌にご投稿を！
テーマ自由。事務局にご連絡いただければ執筆要綱をお送りします。
◎住所変更の場合、必ず新住所をお知らせ下さい。同時に旧住所の最寄り郵便局で新住所あての回送手続きをとって下さい。
◎海外に駐在される方は、駐在先の住所をご連絡下さい。帰国後は直ちに現住所をお知らせください。
◎懐かしいお写真を事務局までお寄せください。会誌、ニュースレター、ホームページに掲載させて頂きます。
◎会員の訃報は同総会誌に掲載いたします。

◎同期会の開催を支援します
同期会等の開催を支援致します。開催計画がお決まりになりましたら機械系同窓会事務局までご相談下さい。
同期会の開催予告等をホームページやニュースレターに掲載致しますのでご連絡下さい。（ホームページは随時、ニュースレターは発行の２ヶ月前まで受付いたします。）
同窓会ＨＰ（http://www.mech.tohoku.ac.jp/dousou/）

編集後記

同窓会ニュースレター第十五号をお届けいたします。今回は、現在機械系が取り組んでいる活動や新しい国際的な教育プログラム、最先端研究、青葉山キャンパスの変化、学生の活動状況など多岐にわたる話題を集めました。同窓生の皆様におかれましては、機械系の活発な活動をご周知頂き、今後ともご指導、ご協力頂ければ幸いに存じます。最後になりますが、原稿執筆にご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

（平田　泰久）

平成21年度通常総会予告

平成21年度通常総会は、平成22年５月15日（土）13：00より東北大学さくらホール（片平キャンパス内）にて開催されます。皆様お誘い合わせのうえ、多数のご出席をいただきますようご案内申し上げます。

詳細は、同封の平成21年度通常総会・特別講演会のご案内をご覧下さい。

１５号．ｐｗｄ　１版裏　田端印刷株式会社

機械二十七年卒同期会

毎年行なっている「機械二十七年卒」の今年の同期会は、静岡地区石川　豊君が幹事となり「富士五湖巡り」となりました。

平成二十一年六月一日（月）、富士河口湖温泉「風のテラスくくな」に、十五時まで、現地集合し、十八時より宴会が始まりました。

卒業時、四十二名だった同級生は、物故者が十四名おり、現存者二十八名のうち、本人や奥さんの健康の優れない人、また、どうしても都合のつかない人が居り、当日は、十名の同級生と保護者（夫人）が六名と十六名出席しました。

最初に、今年亡くなった二名に黙祷をし、一番遠路参加した山口県の斎藤　睦男君の音頭で乾杯して会は始まりました。幹事より、欠席者の近況報告（出欠返信ハガキ）があり、続いて、同級生各自の近況報告に入りました。会は飲むにつれ、学生時代の話・下宿先の話で盛り上がり、最後は「古い顔の唄」を合唱してお開きとなりました。

翌六月二日（火）の観光は、前日の雨とはうって変わり晴天に恵まれ、雲間の富士・河口湖面の逆さ富士に見とれました。

幹事の案内で、忍野八海・久保田一竹美術館・青木ケ原樹海・朝霧高原など素晴らしい観光でした。しかし、目の前に見る富士山の雄姿にまさるものはありませんでした。

十六時、予定どおり新富士駅で、来年、仙台での再会を約束して解散した次第です。

素晴らしい写真は、毎度のことながら、秋山　精一郎君が担当しております。

熊　谷　昭　行
（機械工学科27年卒）

機械三十一年卒同期会

左から　後列：金沢、渋谷、村上、大野、石川、中島、宍戸
前列：小田桐、羽根田、西尾、小野寺、伊藤

秋も深まった十一月十二日（木）機械工学科昭和三十一年卒同期会が開港一五〇年を迎えた横浜の桜木町ワシントンホテル二十四階「東天紅」で開かれた。

小田桐幹事が選定した「東天紅」は生憎の薄曇りにも拘わらず、横浜港を一望し、みなとみらいの建物やよこはまコスモワールドの観覧車が眺められる特等席でした。

出席者は遠隔地からの参加が無かったので昨年より二名少ない十二名、西尾代表幹事の開会の挨拶ののち歓談に入った。

恩師沼知、抜山両先生の話、病歴、メンバーに絵画を趣味としている小田桐、宍戸、西尾君と揃ったので絵の話、原子力産業に携わった小野寺、金沢、中島（力）君らの話から、中空球は内圧と外圧で何れが破壊強度が強いか？など機械屋ＯＢらしい論議に花が咲き、話は延々と続き、いつ果てるとも知らなかった。

我々の年代は昨年、今年、来年が喜寿を迎える所謂「アラ喜寿」で人生を四季に例えれば「冬」にかかって来たところなので、滑り易い地面に足を取られて滑って転ばないよう気を付けなければと自戒しつつ、次回幹事に村上、伊藤君を選出して名残り惜しい同期会を終えた。

羽根田　健
（機械工学科31年卒）

機械三十四年卒同期会

私達機械工学科昭和三十四年卒業生は、今年卒業後五十年を迎えました。この間残念ながら五名の仲間を失いました。

同期会は二年ごとに行っております。みんなが共有できる場である仙台近辺で、一泊二日の日程で大学時代に回帰しております。

今年は十月三・四日（日・月）に、最近温泉が湧き出た松島のセンチュリーホテルで開催しました。参加者は三十一名で全同期生の六割強に相当する仲間が集まりました。殆どの人は現役を引退しておりますが、やっと多忙な仕事から解放され初めて同期会に参加される方、出席予定であったが急きょ仕事でこれなくなるというまだまだ頼りにされている方もおります。

懇親会に入る前に、同期で母校の総長を経験した阿部博之さんから、政権交代後の科学技術行政に関して十五分ほどお聞きしました。

記念写真を撮り、今年亡くなりました大沼克由さんに黙祷でお悔やみを申し上げました。

懇親会では一人一分間スピーチを頂きました。病魔と闘っている人、病気から立ち直った方もおりますが、多くの仲間は仕事から離れても、いろいろな社会で活躍しております。奥様のお世話をしている方、合唱の指導に忙しい方、ヨットセーリングを楽しんでいる方、海外への旅で見聞を広めている方、郷土の本を執筆している方、俳句を詠まれている方などなど、衰えることを知らない多士済々な仲間達です。多忙で、年齢を感じさせない生き方に、お互いに励まされ、明日からの生き方に大きな刺激を受けました。

卒業後我が国の技術立国の礎となり、築きあげ、工業国としての発展に大きく寄与してきましたが、さらに意欲的に社会に貢献しております。

二次会はテーブルを囲んで、お互いに顔を見合いながら、夜の更けゆくのも忘れて語り合いました。

翌日は元気に連れだってゴルフに行くグループ、奥松島の嵯峨渓を探訪するグループ、仙台でご親族と過ごす方、ゆっくりホテルでくつろぐ方、思い思いに過ごし帰宅していきました。

次回も元気で会えることを誓いながら散会しました。

矢　吹　雅　男
（機械工学科34年卒）

機械三十七年卒同期会

二〇〇七年十月に箱根で開催された第十一回同級会で、次回は古希を祝って桜の季節に仙台で、との提案があった。それを受け、〇九年四月に仙台地区では四回目となる同級会を開催した。準備は〇八年四月から始まる。しかし、一年後の桜の開花日と天候を予測することは至難の業である。そこで、在仙幹事二人（下田、山川）は我ら自慢のメール網を使って仙台の桜の開花傾向と同級会案を諸氏に送り、意向を問うた。その結果、開催日は〇九年四月十三、十四の両日、また同級会は第一部「教養課程の三ヶ月を過ごした思い出の地、三神峯公園（旧富沢分校）での花見の宴」、第二部「後輩・橘氏（武山研出身）が経営する秋保温泉・岩沼屋での古希を祝う会」、第三部「仙台思い出の地巡り」の三部構成で行うことに決定した。

さて当日は、幹事の精進が良かったのか、快晴。桜は六、七分咲き。絶好の花見日和である。

●第一部「花見の宴」

老幹事二人は重労働にもめげず花見必需品を三神峯公園に荷揚げ（？）し、参加者二十九名を待つ。定刻十三時より二十分ほど遅れで全員が揃い、再会を祝して乾杯。公園一面に咲く見事な桜に感動し、公園内の諸々の碑を語り、樹木の間から旧富沢分校（当時の建物は鉄筋三階建の一棟しか残っていない。）を眺め、記念写真を撮りあい、全員感動の一時を過ごす。

十五時三十分過ぎ第一部を終え、旧分校構内（核理研）を覗き、ホテルのバスで第二部の会場、秋保温泉・岩沼屋へ移動。途中、核理研門前で散歩中の同期生、内田元応化教授に偶然出会う。彼は応化卒ではあるが同期生。お互い知る者も多く、感激の再会しばし。

●第二部「同級会（古希を祝う会）」

入浴後、型通りの宴会。古希と言えども皆さん若々しく、三神峯の桜と同様に思い出話も満開。二次会、三次会へと深夜まで話は尽きない。

●第三部「思い出の地巡り」

翌朝九時、ホテルのバスで思い出の地巡りに出発。天候は晴れ。西の平、八木山橋（旧つり橋）を経て東北大・青葉山キャンパスへ向かう。所狭しと建つ工学部の建物群に驚きつつ、青葉山キャンパスを一周して青葉城址へ。

我々三十七年卒には神奈川県在住の石渡、緑川の両氏が主催する「散策の会」がある。毎年二回、平均十八、九名が参加し、東京とその近郊の名所を四、五時間かけて散策する会である。皆さん健脚である。それ故、今回の同級会でも以降の行程はすべて徒歩である。

さて、青葉城址前でバスと別れ、八木山橋から龍ノ口渓谷を覗き、青葉城址へ。青葉城址から仙台の町並みを眺め、仙台市の変貌ぶりに驚く。添付の写真はその時の一枚である。

青葉城址を堪能した後、懐かしの川内キャンパスへ。本日は学生時代に戻り学食での昼食である。新入生でごった返す学食で二七〇円（？）のカレーコロッケを食べる。ちょうど学生の履修届の時期。周囲の新入生諸君は履修科目の話で持ちきりである。彼ら、彼女らに話しかけると、我々の話にも乗ってくる。また、問いかけると的確な返事が返ってくる。最近の東北大生は云々とよく話には聞く。いやいやどうして、後輩には磨けば光る素晴らしい学生が多い様だ。教員の責任は大きい。昼食後、川内構内を一巡。米軍の遺産・カマボコ校舎で学んだ我々には見慣れぬ建物ばかりである。それもそのはず入学時から五十一年も経つ。誰か曰く、唯一記憶にあるのは川内郵便局ただ一つであったとか。

川内キャンパスでの散策を終え、瑞宝殿、御霊屋橋を経由して、片平キャンパスへ。勿論徒歩である。片平正門では、数年前にこの付近に現れた野生の子熊の話も話題になる。現東北大に詳しい矢崎氏の発案で史料館へ。史料館には我々の学生実験風景など、三十七年卒生の写真も数多く展示されている。感激！またまた学生時代に戻り、思い出話に花が咲く。その後、学舎だった旧機械工学科（現多元研究所）と流体研を訪れ、北門で解散。多分十六時頃だったと思う。皆さん、良く歩きました！

この二日間、また前記散策の会等を通し感じるのは、「機械昭和三十七年卒の絆の強さ」である。これも製図室に籠もり、夜を徹して図面を書いた必修科目「設計製図」のお陰かも知れない。その後一ヶ月余、当日の写真等がメールで飛び交ったことは言うまでもない。

山　川　紀　夫
（機械工学科37年卒）

菊地英一 氏　撮影

機械四十一年卒同期会

昭和四十一年機械工学科卒業生の同期会を平成二十年十一月九日（日）から十日（月）にかけて千葉県舞浜にて開催しました。我々同期会は二年毎に地域ごとに幹事会を編成して、持ち回り形式で開催してきました。

これまで、静岡日本平、仙台、神奈川県湯本温泉、岐阜県長良川、長野県別所温泉と温泉をメインに実施して来ましたが、今回は、趣向を変えて大都会の東京または東京近郊でやろうということで千葉県舞浜が選ばれた次第です。この理由の中で大きなウェイトを占めたのが、東京ディズニーランド、東京ディズニーシーがあり、また、江戸情緒を残す屋形舟での宴会を味わおうというものでした。ほとんどが現役を引退し、時間に余裕があり、また今まで若者の集まる所という理由で訪れたこともないディズニーランドへ足を延ばすいい機会と思った次第です。

幹事役としては、千葉県在住の石橋君、斉藤君、丹野君、飯島君、そして杉本があたりました。

幹事役は事前準備に何度か集まりましたが、準備作業はほんの二十分程度で終了し、その後の飲み会が盛り上がったのは言うまでもありません。

準備も整い、参加者は二十九名（夫婦同伴は九組）とこの種の会としては沢山参加してくれたことには幹事一同感謝しております。

会当日は十五時三十分までにホテルへチェックインし、十六時にホテルで準備してもらったバスで屋形船の出る桟橋に向かいました。前日まで曇り空で雨風の心配をしていましたが、この日はそれもなく、無事出港することができました。

この屋形船による東京観光の名物になっている東京湾クルージングと宴会は、東京湾クルーズで、約二時間から三時間のクルージングで、宴会をしながら東京湾から近代ビルの夜景を見るものです。変貌をとげているお台場エリア、ライトアップに輝く東京タワー、オフィス街の夜景を目の当たりにし、我々学生時代の東京との変貌に、日本の発展に貢献し一役かってきたことを思い出さずにはいられませんでした。

宴会での料理は東京湾から水揚げされた「あなご、きす」等を船内、それも目の前で天婦羅にしてくれます。江戸前の刺身や寿司に参加者全員、大いに舌鼓を打ったものでした。

会は先ず、これまでに亡くなられた七人の方々のご冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げることより始まりました。その後、各人の近況報告に入りましたが、「一人一分程度に」という司会者の案内にもかかわらず、一人で十分位熱の籠った話をする人もあり、夜景を楽しむ時間が無くなりそうな気配でした。それでも、ポイントポイントでは船外に出て、移りゆく夜景を背景に友人同士、また夫婦でカメラに収まっていました。

皆さんのほとんどが、現役を引退した人でしたので、話題は「これからの人生を健康第一で明るく、楽しく、元気よく過ごそう」ということで、まさに、第二の人生のスタートの宣言の感ありといったところでした。

この屋形船にはカラオケの装置もありましたが、二、三人しか歌う時間がないくらい話に花が咲いて、あっという間の三時間でした。

席上、最も大切な決議事項として「二年後の同期会を何処でするか」という事でしたが、幸い群馬地方に在住の天田君、田村君のボランティア精神に乗って、全員一致で群馬県の温泉で再会することが決まりました。

たくさんある同期会の中では、夫婦同伴参加が多い「四十一年卒同期会」この雰囲気をいつまでも続けたいものだと、皆で学生歌「青葉燃ゆる」を歌いました。東京湾に高らかに歌声が響き渡りました。

翌日は各人それぞれの計画に沿って散会となりました。

すでにホテルのロビーには見上げる程大きなクリスマスツリーが飾れてあり、その前でさよならの握手を交わしそれぞれ去ってゆきました。

その後ろ姿を見送りながら、われわれ幹事一同、大役を終えた喜びと同時に、「二年後また元気に！」と再会を祈念せずにはいられませんでした。

杉　本　良　則
（機械工学科41年卒）

機械Ⅱ四十四年卒同窓生より

―四十年も経過してしまった！―

卒業生の皆様、お元気でしょうか？特に私の年代（卒業後四十年）は殆どの方々定年退職後の悠々自適な毎日を過ごしていると思います。私も例に漏れず、昨年三月末で難（セクハラ、パワハラ、アカハラ）無く、目出度く東北大学（流体科学研究所）を退職しました。

そんな節目の時でしたので、改めて大学時代のアルバムをめくって見て驚いた次第です。左の写真をご覧下さい。機械系二号館屋上から写した卒業式当時の写真と現在の写真です。遠くに太白山が見えるので同じ場所だと判別できますが、大学の青葉山キャンパスの風景は全く変貌しています。頭の中での記憶ではそんなに昔の話では無いのですが、現実を突きつけられてショックでした。当然ながら昔の写真に写っている自分と同級生の変貌も、昨年十二月東京で開催された同級会で知り、お互い口あんぐり状態でした。全く分からない同級生も居たくらいです。

〝少年老い易く学成り難し〟の言葉をしみじみ味わっているこの頃です。まともに学も成し遂げられないまま少年はもうとっくに老いてしまっています。

少し大学の近況をお話しましょう。不況真っ只中の日本でも東北大学ではあちこちのキャンパスで建設ラッシュです。特に食堂などの厚生施設およびその周辺環境は魅力的に変化しつつあります。私たちの時代は、工学部移転直後だったので赤土一色、無機質で打ち放しのコンクリートジャングルしかありませんでした。しかし、今は工学部キャンパスのケヤキ並木も大きくなり、左右の枝が道を覆い隠すまで成長、建屋の外壁もお化粧直しをし、少しづつではありますが、魅力的なキャンパスに変わりつつあります。

現在私は、NEDOプロジェクト「高効率高速輸送システムの研究開発」推進のために引き続き母校で研究活動をしています。勤務先は青葉山キャンパスの「未来科学技術共同研究センター（Niche）」です。五年後に地下鉄東西線が開通すると青葉山駅に一番近くなり、今盛んに工事が進んでいます。研究内容は左図にあるような〝エアロトレイン〟の研究開発で、地面効果と呼ばれる流体現象でエアークッション効果を発生、十cmほど浮上して非接触高速走行する乗り物で、一番の売りは〝驚くほど少ないエネルギーで走行できる〟事です。来年春までに二人乗り機ART003号機を開発して二〇〇km/hを実現、他の既存の輸送システムと比較して格段にエネルギー効率に優れることを実証します。宮崎県日向市にある旧リニアーモーターカー実験線を利用して実験を行っています。

仙台にお越しの折には是非魅力を増しているキャンパス訪問してください。多分知り合いの先生方は殆ど居らず、その意味では別の大学に思えるかも知れませんが、学生時代に過ごしたキャンパスは必ずや甘酸っぱい昔の学生生活を思い起こさせてくれます。

小　濱　泰　昭
（機械工学第二学科44年卒）

機械Ⅱ五十七年卒同期会

平成二十一年六月二十日に、横浜は二俣川の謝朋殿にて、三戸先生（学年主任を担当頂いた）と、中島教授をお招きし、同期二十六人が集い、実に約二十年ぶりで二回目の同窓会を行いました。

各自の近況報告では、わざわざこの会出席だけの為に、貴重なお土産とともに中国から帰国した岡田君、就職希望先へ三戸先生から、プレッシャーを掛けて頂いたお陰ですんなり就職できたと明かした者（誰だっけ？）がいたりと、久しぶりの再会に盛り上がりつつも宴は進んでいった。

更に当時のエピソードに話が至り、工学部運動会で、優勝は逃したものの、その後の反省会は、大盛況となり過ぎて、救急車を何台も呼び、大学病院だけでは収容しきれず、方々の病院に分担収容される事態を招いたことにも話は及んだ。

この事件の後始末に、それらお世話になった関係先全てへ、学年主任であった三戸先生が、謝りに奔走したのであった。その件で、先生は随分ご立腹なさっていた事などが、不謹慎にも懐かしく思い出された。

今思い出しても三戸先生には大変良くして頂き、大変ありがたいと、同期全員が思うところである。

かくして、会は大いに盛り上がり、横浜駅近くに場所を移動し、二次会、三次会と続いた様だが、私には三次会の記憶がない。この齢で救急車のお世話になる難は辛くも免れ、翌朝自宅で目覚める事が出来た。

今回は安田幹事長指揮の下、横浜周辺組みが準備を行ったが、次回は仙台開催で、第一部はキャンパスめぐり、第二部宴会と、すでに企画も出来上がる程、仙台組がやる気満々である。しかし、五十七年同期は結束が固く、先頭を切って物事を進めるタイプが少ない。具体的に行動を起こす誰かが出るものなのか？何年後の開催となる事やら些か心配ではあるが、そこは遠藤守也君、千葉秀樹君らの奮起を期待し、今回出席出来なかった面々と再会出来る事を楽しみに待つ事にしよう。

松　橋　博　基
（機械工学第二学科57年卒）

精密三十三年卒同期会

風薫る五月。二年振りの同窓会が懐かしい仙台で開かれた。十一人が仙台駅前に集まりマイクロバスで秋保温泉に向ったが、みんな元気そうだったので急遽途中下車し磊々峡をミニハイクした。渓流の両岸に連なる奇岩怪石に思わず歓声があがる。藤の花が美しい三筋滝では出会った美人に集合写真を撮って貰いいい記念になった。

いい汗をかいて岩沼屋に着くと早速露天風呂に飛び込んで積もる話に華が咲いた。この二年の間に亡くなった友人二人に献杯してから始まった宴会では、各二分以内の近況報告をお願いしたが時間を守る人は殆どいない。その上平均年齢七十四才になった為か病気の話が多くて、参考にはなるがどうも湿っぽい。H君が手描き手作りの画集を配り、M君がプロはだしの写真集を披露してようやく明るくなってきた。僕からは〝山と旅〟という素晴らしい画文集（自分で言うのはおかしいか？）を全員に贈ったがその活躍振りにはみんな大いに刺激された様だ。又その中に納めた工学部屋上の下駄ばき学生服で談笑するセピア色の写真を、みんな懐かしそうに覗きこんでいた。

二次会に移ってからも談笑は深夜まで続いたが、酒の量は昔よりぐっと少なくなっていた。

翌朝はバスで西へ走り、急な階段を上り下りして秋保大滝を見物。前夜の雨を集めた大滝は水嵩が増して迫力満点だった。しかし元気な五人は更に険しい道を滝壷近くまで下っていった。

昼前に仙台へ戻り《次回は関西で再会する》事を約束して〝白松が最中〟をお土産に各次なる目的地へ散っていった。

〇九―五―二十三
伊　藤　雄　介
（精密工学科33年卒）

精密四十年卒同期会

前列左から　金岡案内人、鳴海婦人、松浦婦人、松田婦人
後列左から　石田案内人、鳴海、佐々木、松浦、松田、目黒、飯野、塙、及川

片平町校舎の精密最後の卒業生である我々は、卒業以来四十四年になるが、最近はいろいろな会合を毎年の如く開催している。学年理事の及川忠雄、佐藤裕久君が音頭をとり、企画ごとに幹事が自己申請で行う仕組みとなり、自律的な組織なってきた。昨年の二〇〇八年秋には名古屋で鳴海忠孝、櫻井克夫、今仁雄一幹事の主催で開催され、二十六名（含む奥様）が集まり盛大であった。今回は、二〇〇九年春に千葉で行われた松浦瑛一幹事の詳細な計画を基に開催した「里見公園、万葉の道等の春の散策状況」を紹介する。

米国アラバマ州在住の松田弘三君の春の来日にあわせ、市川市近郊の春の散策となった。参加者は十一名で三月二十八日（土）に行った。四十四年ぶり会う人もいて、学生時代の面影を有しており再会を喜んだ。

桜は三分咲き、肌寒い中を、江戸川沿いを歩いて室町時代に里見氏が北条氏と戦った古戦場跡の里見公園で、下記の記念写真のあと里見氏一族が布陣の際に飲用水として使用したと伝えられる「羅漢の井」などを散策した。

その後、辻切りで有名な国府台天満宮、曹洞宗関東僧録寺の一つである総寧寺、行基菩薩や弘法大師の建立伝説がある弘法寺を見学。境内には水原秋桜子、富安風生、小林一茶などの句碑や、二葉の楓、また見事な花を咲かせていた樹齢四〇〇年の伏姫桜前で記念撮影をした。次に、万葉集にゆかりのある亀井院、万葉の時代、この地域にはたくさんの州があり、その州から州へのかけ橋が「継橋」だったという真間継橋などを見学の後、JR市川駅の近くの市川グランドホテルで昼食、和洋折衷のバイキング。食事・歓談をしながら、近況報告を行う。特にアメリカに永住を決断した松田君の米国生活の話は、興味を引いた。

その後、映画「男はつらいよ」で有名な柴又駅から帝釈天参道を散策、だんご屋「くるまや」のモデルになった高木屋さんなど、参道を歩いてみると下町の風情が感じられる。美味しいものから、昔懐かしい物など色々あった。

柴又帝釈天題経寺や寅さん記念館で、懐かしい映像、模型などを見学し、再会を期し帰路についた。

及川　忠雄、松浦　瑛一
（精密工学科40年卒）

精密三十四年卒同期会

我が同期会、一昨年に次ぐ二回目、平成二十一年十月二十、二十一日、北信濃は山田温泉郷で開催。当日十五時、JR長野駅集合。総勢八名。マイカー二台で四十分程、温泉入口の高井橋で下車。ここは松川渓谷随一の紅葉ビューポイントで、眼下一〇〇m余の谷底から両岸天空まで広がる紅葉の絶景に、一同しばし感嘆。夕暮れ近く創業二百年余の宿「風景館」に入り、紅葉の夜景を愛でつつ、一五〇もの石段を下った渓流沿いの仙人露天岩風呂でゆっくり湯浴み。宴会、まずは卒業五十周年、あらためて諸先生の御恩を思い浮かべつつ、ともかくも元気で相まみえたことを互いに祝し乾杯。幹事より卒業三十三名中、すでに十名もの同期が物故との紹介に、諸兄の在りし日を偲び懐かしむ。欠席諸氏、ご多用なる向きは大慶なるも、療養中との報には心痛めつつ平癒を念ずる。宿が心尽くしの地産地消酒肴に舌つづみ杯重ね各自の近況紹介。〝年ごろ〟とて各人部品あちこちガタ。その対応修復の苦心など健康談次々。救急車のお世話になった経験談に曰く「二度と乗るものではない。なにしろガタピシと頭が痛かった」との述懐に、「似たやつですごく乗り心地の良いのがあった。レイキュウシャ！」の披露に大笑いの一幕。それぞれが日頃に取組の地域役員やボランティア活動、旅行、趣味等々紹介。各人それぞれ、所を得て生き生きたる様は同慶のかぎり、喜びを共にす。部屋での二次会、話題多岐。過年NHK―TVプロジェクトX「富士山頂上レーダー建設　男たちは命をかけた」に出た木名瀬兄の回顧談。時は昭和三十八年の厳冬二月、冬山経験ゼロの登頂決行を前に「初めて（最後の）遺書を書いた」等、難航局面での裏話の数々。その他話し尽きず。

翌朝、旅館を後に標高一九〇〇mの笠岳峠へ。空気澄み渡る好天に、遥か北アルプス連峰が端からはしまでくっきり。眼下の山田牧場、下界の紅葉など眺望満喫。裏見の〝雷滝〟頭上の轟音に肝を冷やす。最後は車で二〇km余、松代藩十万石の地、今回の隠し玉、太平洋戦争末期、本土決戦最後の拠点に構築の幻の「天皇御座所・防空壕」と「大本営地下壕」に案内。四m×高さ二・七m、碁盤の目状総延長十km余の巨大坑で、昼夜突貫、人海作戦の掘削なる由。ヘルメット頭に岩盤壁剥き出しの坑を歩みつつ、今にして思えば狂気の沙汰の様に、戦中世代の一同、いまだ戦争を根絶し得ぬ昨今に思いを巡らす。今般、一夜往時を懐かしみ近況語り合い、信濃の秋紅葉を愛で自然を満喫して身も心もリフレッシュ。各人それぞれ、明日への活力を一杯に貰った思いを胸に、次回二年後東京での再会を約し、長野駅頭にて散会。後日、欠席諸兄も含め、記録とミニアルバム版写真を送った所、反響多々。早速に次回待ちかねの便りが次々。

それにつけ我が世代、まさに「朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身」。さてこの上は日々精進をし、夫々の息災、お天道様の思し召しを念ずるのみ―。

佐　藤　忠　一
（精密工学科34年卒）